

年譜（『磐水年譜』、『磐水存響』坤所収）を補う上に欠かせない。

（京都市）

下野国壬生・鳥居藩における解剖図 について

石 崎 達

栃木県（下野国）下都賀郡壬生町は戦国時代より大名の城を構えた町で、正徳二年（一七二二）以来幕末まで鳥居家の所領三万二千石の城下町として栄え、日光連山に源を發する黒川と小倉川は所領の南端で合流し黒川となり、これは渡良瀬川と合流して利根川に合流している。したがって舟便を利用した物産の集散地として商業的にも栄え、舟町と称する区画には廻船問屋があった。

鳥居家は壬生を一六〇年余にわたり領有し、隣に宇都宮藩（戸田家八万石）をひかえ、又天領である商業中心地栃木（現在栃木市）とも関連して文化の中心の一つでもあった。

幕末領主は新知識の吸収につとめ、天然痘の流行に対処して若殿を始めとして主として少年以下に種痘を施行し、天然痘の害を最少にいとめてゐる。

首席御殿医四代目石崎正達はこの殿の意をくんで蘭法医
斉藤玄正を町医から御殿医に推薦している。

天保一一年一月石崎と斉藤は刑場において打首死亡し
た罪人の解剖を行って、絵師高倉東湖という人に解剖図を
写生させ、彩色をほどこした。又各臓器別に分類し、すべ
てに名称を付した。現在刑場跡および斉藤玄正の住居場所
は判明し、石崎正達は演者の先祖である。ただ高島東湖に
ついては事跡がわからない。

各臓器の名称の大部分は現在と殆ど変りがない。おそら
く、このときより七〇年前杉田玄伯等によって千住小塚原
で行われた解剖と、解体新書の訳が利用されたものと思わ
れる。

現物は東京都在住の荒川氏の所有になっているが、その
理由は私の母が明治年間に荒川氏の祖父に与えたものであ
る。

(独協医科大学)

長崎浩齋著『蘭学解嘲』と小石元瑞 について

津田進三

『蘭学解嘲』は越中高岡の蘭方医長崎浩齋が、その師大
槻玄沢の著した『増訂解体新書』の附録下巻の記事に触発
されて、漢方医からの蘭方医学批判に答える意図で著され
たものである。

長崎浩齋は寛政一一年九月七日高岡に生れ、高峯幸庵に
学んだあと、文化一四年(一八一七)江戸に出て大槻玄沢
と杉田立卿に師事し、蘭方医として加越能三州に頗る高名
であった。元治元年(一八六四)九月一四日六六歳をもつ
て没したが、『近代著述目録後編』には『和蘭医学解嘲』、
『医話』、『医学物語』など九種の著作が挙げられている。

一方、浩齋は師事せんとして果せなかつた杉田玄白への
尊崇の念が厚く、文政三年(一八二〇)杉田玄白の三年忌
に出席した浩齋は、同年九月大槻玄沢から『蘭東事始』の